



Data

監督：エフゲニー・ルーマン
脚本：ジヴ・ベルコヴィッチ／エフゲニー・ルーマン
出演：ウラジミール・フリードマン
／マリア・ベルキン／アレキサンダー・センドロヴィッチ
／エヴェリン・ハゴエル

👁️👁️ みどころ

“東西冷戦”時代のソ連でも、ハリウッドやヨーロッパの映画は母国語に吹き替えられて人気だったらしい。しかし、その職場で長年活躍した『GOLDEN VOICES』の2人も、1990年にはソ連からイスラエルへ移住！『声優夫婦の甘くない生活』という邦題はまさにピッタリ！

妻は、夫に「香水を売る仕事」と嘘を吐きながらテレフォンセックスでの高収入の仕事にありついたが、声優のプライドに固執する夫の方は？

コロナ禍の中、“鎖国状態”を強めている日本はイスラエルのことをほとんど知らないが、彼の国ではガスマスクが日常ならイラクからのミサイル警報も日常！？本作ではユーモアも皮肉もタツプリの老夫婦の個人的な生態が面白いが、それを生み出す時代状況、時代背景もしっかり確認したい。本作を観るにつけても、つまらない邦画が多いことを改めて痛感！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■英題は『GOLDEN VOICES』それがこの邦題に！■□■

日本で上映されるのは珍しいイスラエル映画たる本作の英題は『GOLDEN VOICES』だが、それでは何の映画かさっぱりわからない。しかし、邦題の『声優夫婦の甘くない生活』なら、なるほど、なるほど。日本で声優という職業に従事している人がどれだけいるのかは知らないが、パンフレットの中で「声優夫婦対談」を繰り広げている古川・柿沼夫妻を始め、日本の声優たちは、この邦題に魅かれてこぞって本作を鑑賞するはずだ。しかし、同じ声優という職業でも、現在の日本と1990年当時のソ連やイスラエルとでは、政治・軍事情勢はもとより、映画館で上映される映画やその字幕の作り方、そして声優を巡る状況は全然違うはずだから、本作を観れば、まさに「声優夫婦の甘くない生活」がよくわかる。

新型コロナウイルス騒動の中、“鎖国状態”と言わないまでも、“インバウンド需要”を完全に失ってしまった日本では、徐々に対外的な閉塞感が強まっているが、そうでなくても、元々島国に住む日本人は、長い間祖国を持たないまま世界中に散らばって生きてきたユダヤ人のことはほとんど知らないし、理解しようとしにくい。したがって、第二次世界大戦後の“東西冷戦”時代のキーワードになっていた“鉄のカーテン”が崩壊した1990年9月に、声優夫婦の夫ヴィクトル・フレンケル（ウラジミール・フリードマン）と妻ラヤ・フレンケル（マリア・ベルキン）の2人が、大勢のユダヤ人移民と共にソ連からイスラエルの空港に降り立ってくる本作冒頭のシークエンスを理解するには、それなりの基礎勉強が必要だ。この2人はソ連に届くハリウッドやヨーロッパ映画の吹き替えて活躍する声優夫婦だったが、なぜそんな2人がソ連を離れてイスラエルへ？そして、イスラエルでの第2の人生のスタートは？

■この順応力の差に注目！やっぱり男はダメ？■

共に60歳を超えての厳しい第2の人生のスタートだが、ためらいながらもすぐにテレフォンセックスの仕事に就き、高収入をゲットしたのはラヤ。それに対して、思うような仕事にありつけないヴィクトルは、違法と知りつつ海賊版レンタルビデオ店で働き始め、映画館で盗撮活動までする羽目に。ラヤが「電話で香水を売る仕事」と嘘を吐いたのは夫を気遣ったためだし、そこでの高収入だけで老夫婦の生活費ぐらいいは稼げたのに、ヴィクトルはなぜ自分の収入や仕事にこだわったの？本作前半ではそんな夫婦のすれ違いぶりに注目すると共に、60歳を超えてなお「私はバージン」と名乗り、次々と男（の欲望）を変幻自在の七色の声で手玉に取るラヤの才能にビックリ！どの世界でも、女の方が男より順応力が高いのは明白だが、本作ではそのラヤとヴィクトルの差に注目！

もっとも、ソ連の有名な声優であることに気づいた映画館主によって、ヴィクトルが危うく逮捕を免れたのはラッキーだった。さらに、ロシア系移民のために新作映画を上映するにあたって、ヴィクトルを高給で雇うと言ってくれたから、ヴィクトルにとっては願ったりかなったりだ。しかし、そこで『ホーム・アローン』の上映を狙っていた館主に対して、ヴィクトルが、フェデリコ・フェリーニ監督の最新作『ボイス・オブ・ムーン』を強力に勧めたが、その結果は・・・？やっぱり、男は不器用！やっぱり男はダメ？

■なぜ秘密がバレたの？これで夫婦関係は一気に破綻！？■

男は不器用で嘘を吐くのが下手だが、女は上手。その一般論がフレンケル夫婦にも当てはまるのが、前半の展開を観ているとよくわかる。しかし、「天下布武」を唱えて上洛を果たした織田信長の天下が長く続かなかったように、また、彼を討ち取った明智光秀の天下も3日しか持たなかったように、マルゲリータと名乗って次々と顧客を獲得し高収入を得ていたラヤのお仕事が、夫のヴィクトルにバレしまうと・・・？中国映画『活きる』（94年）（『シネマ5』111頁）は、「禍福は糾える縄の如し」を地で行くストーリーが面白かったが、本作でも、やっと自分本来の能力に見合う仕事を見つけたと喜んだヴィクトル

が、「マルゲリータがあなたの妄想を叶えます」という新聞広告を見て、自分へのご褒美のつもりで電話をかけてみた後のストーリーと、その顛末は如何に？

第三者ならともかく、長年連れ添った夫なら、そして同じ声優としてプロの道を行ってきたヴィクトルなら、「私、マルゲリータよ」と名前を偽っても、それがラヤの声だとすぐにわかったのは当然。さあ、この電話によって「香水を売っている」という説明が真っ赤な嘘だったとバレてしまった夫婦関係の行方は？

■□■この女ゴコロは如何に？10歳年上の私にも不可解！■□■

本作の脚本は、自分の子供時代の経験をもとにエフゲニー・ルーマン監督が共同で書いたそうだ。その“経験”とは、フレンケル夫婦と同じロシア系イスラエル人であるエフゲニー・ルーマンが、家族とともにソ連からイスラエルへ移住してきたことを指すもので、テレフォンセックスの描写は経験談ではないはず。なぜなら、エフゲニー・ルーマンはフレンケル夫婦がイスラエルに移住した1990年はまだ11歳だから、まさか11歳にしてテレフォンセックスにハマったことはないはずだから。しかしそれにしても、デヴォラ（アレキサンダー・センドロヴィッチ）を経営者とするテレフォンセックス店の実情は実によく描けているから不思議・・・？

他方、マルゲリータの声にぞっこんとなり、常連客となった男・ゲラ（エヴェリン・ハゴエル）とラヤの興味深いエピソードも面白い。もっとも、高い電話料金が妻にバレたため、これ以上電話できなくなったので「最後に一目だけ会いたい」と店の規則上無理なことを頼んできたゲラと、これに対するラヤのエピソードの結末は、ラヤより約10歳年上でベテラン弁護士の私でも理解できない。そのエピソードは、パンフレットの「STORY」の中に詳しく書かれているが、なぜラヤはそんな行動をとったの？その時、本当にラヤはヴィクトルに見切りをつけ、ゲラに恋をしていたの？さらに、なぜラヤはゲラに対して「30歳にしてまだ処女のマルゲリータは、実は私だ」と告白したの？私は72歳にして、なお本作に描かれるこの女ゴコロが不可解だが・・・？

■□■この国ではガスマスクが日常なら、ミサイルも日常！？■□■

朝鮮戦争後の朝鮮半島における北朝鮮と韓国は「停戦状態」だから、いつ軍事衝突が起きても不思議ではない。また、香港情勢を見ても、台湾情勢を見ても、さらに中国 vs インドの国境紛争を見ても、いつどこで軍事衝突が起きても不思議ではない。そんな世界情勢にノー天気なのは日本だけだ。本作を観ていると、イスラエルでは、ヴィクトルが一時、販売に従事していたガスマスクが日常なら、ミサイルが飛んでくるのも日常(?)だということがよくわかる。

1990年当時のイスラエルの“敵”は、フセイン大統領が君臨するイラク。フセインの化学兵器の脅威にイスラエル国内では緊張感が高まっていたから、ヴィクトルにはガスマスク販売というお仕事が回ってきたわけだが、これは足にマメができるほど歩き回らなければならない仕事だった。そのためヴィクトルは、やっぱり声優の方がいいと考えて、

それを模索したわけだが、イスラエルで一時的にせよそんな仕事に従事したことによって、ヴィクトルにはガスマスクが日常のものになったらしい。

ウソの仕事がバレたことによってヴィクトルとの夫婦関係が完全に決裂したラヤは、その後店主のデヴォラの家に居候させてもらっていたが、そんな状況下にヴィクトルがガスマスクを届けてくれたからビックリ。これによって、一時破綻しかけていた夫婦関係は元のさやに戻るのかと思われたが・・・？

■□■ミサイル発射の警報が鳴り響く中で迎える結末は？■□■

本作のクライマックスは、ヴィクトルがあれほど固執していたフェデリコ・フェリーニ監督の『ボイス・オブ・ムーン』の上映を巡るシークエンスになる。ヴィクトルが大きな期待感をもって映写室から観客席を眺めていたのは当然だが、観客の数はアレレ・・・。「これならやっぱり『ホーム・アローン』にすればよかった」と映画館主を後悔させてしまったから、ヴィクトルの責任は重大だ。

ところが、そんな中で突然鳴り響いたのが、イラクからのミサイル発射を告げる警報音。日本でも時々避難訓練のためにケータイで警報音が鳴ることがあるが、ガスマスクやミサイルが日常のイスラエルでのこの警報音は訓練ではなく本物らしい。そんな“現実”を受けて、ラヤの身を案じるヴィクトルが向かったのは彼女の職場だが、その時ラヤは一体どこで何を？自分の子供の時の経験談をネタに本作の構想を練り、脚本を書いたエフゲニー・ルーマン監督が、私たちに見せてくれる本作のクライマックスは“想定範囲外”だが、なるほど、なるほど・・・。

イスラエルは近年、ネタニヤフ首相率いる右派の政党「リクード」を軸に、中東の地では比較的安定した政権運営を誇っていた。しかし、2020年12月23日が期限と定められていた2020年と2021年の予算が成立しなかったため、国会の解散が決まり、2021年3月23日に総選挙が実施される見通しになった。これは、ここ2年間で4回目の総選挙だから、その政治的混乱ぶりは大きい。それと同じように(?)、本作ラストに見るイラクからのミサイル発射の警報は一大事だが、さあ、イスラエルはどうなるの？また、そこで新天地を求めてソ連から移住してきたヴィクトルとラヤ夫婦はどうなるの？それは、来年9月までに日本でも必ず実施される衆議院議員総選挙のことを考えながら、あなた自身の目でしっかりと。

2020(令和2)年12月28日記